

森林レクリエーション利用者が認識する風景

関西支所 奥敬一，深町加津枝，大住克博

1. 人々は森で何を見ているのか？

例えば、林内の散策コースを歩いている自分（仕事ではなく）を想像してみてほしい。あなたは、いったいどこを見ているか、森林の良さを感じ、どういう場面で楽しいと感じるだろうか。

実のところ、これまでの森林レクリエーション（以下レク）や森林景観についての研究は、この問いを微妙に避けて通ってきた感がある。もちろん経験的な話としては、いろいろと語られてきていた。しかし、従来の研究手法の多くは、研究設計の操作性を優先していたため、現地、あるいは、本物のレク利用者を対象とすることは極めて少なかった。そのため、「現実の」レクで、何が、どのように感じられているかという知見はほとんど蓄積されてこなかったといえる。森林の風景やレク体験の質を高める技術を開発することは、これからの時代の森林管理にとって重要な課題である。そのため、人々が森林の中で実際にどういった場面で風景としてとらえ、どう感じているのかを、本物の利用者を相手にして明らかにしていく必要があるだろう。

2. 写真投影法

実際に人々が遭遇する風景を記録するために有効な手法が、写真投影法である。写真投影法はカメラを来訪者に貸与し、一定のテーマについて撮影してもらった後に回収することにより、被験者の環境に対する認識を明らかにする調査手法である。普通の記入式アンケートと比べ、調査する側・される側双方の言語表現・理解能力に制約されず、一般のレク利用者が現実体験した風景のよさや楽しさを、「すぐさま、その場で」映像の形に記録でき、また行動をあまり制約せずに多くの記録を拾い上げられる、といった点が大きな特徴である。一方、視覚的でない体験（その時の気持ちや疲労、音環境など）の記録には適していないため、質問紙を補助的に用いる場合が多い。

(右側上へ)

3. 調査の概要

調査は大阪近郊の代表的レク林である箕面国定公園で、1994年5月から11月にかけて4回行った。81グループに対して、25枚撮影できるレンズ付きフィルムを配布し、よい風景や楽しいと感じた出来事を撮影するように依頼した。また、被験者の属性等について質問紙による調査を行った。解析に使用した写真は露出不足のものを除く1377枚であった。表1はグループ類型と活動類型、来訪回数の関係を示している。子供連れや多人数の若いグループは園地周辺に滞留し、バーベキューをしたり水辺で遊ぶ傾向が強かった。一方、年輩者のグループは全て散策型の活動形態であった。

表 1. グループ類型と活動類型、来訪回数

	活動類型		来訪回数			合計
	滞留型	散策型	0	1-5	6-	
グループ類型						
子供連れ家族	17	14	8	8	15	31
30代以下グループ（3名以上）	6	4	7	1	2	10
30代以下カップル	3	7	1	3	6	10
40代以上カップル	0	26	0	3	23	26
40代以上単独行	0	4	0	0	4	4
活動類型						
滞留型			10	4	12	26
散策型			6	11	38	55
合計	26	55	16	15	50	81

各数値はグループ数を表す

各数値はグループ数を表す

4. 風景認識の階層性

視対象によって、被験者に撮影される頻度には違いがあるだろう。そこで、利用者の行動範囲をいくつかの地区に分け、地区ごとに現れる様々な視対象が、どれくらいのグループによって何枚撮影されているかを示す指標を設定した。その値を用いてクラスター分析し、撮影頻度による視対象の分類を行った。表2はこの結果を整理し、地域のランドマークとなる風景群、よい風景として認識されやすい（図になりやすい）風景群、認識される度合いがやや低い（地に近い）風景群、各人に固有の見方による風景群（さらに視点の特定が可能なものとそうでないものに分けられる）、といった階層的な構造を示したものである。

(左側下へ)

また、撮影された写真のうち、多くは散策路周辺の何気ない林内風景を撮影したものであり、傑出したランドマークは、多くの被験者に共通して撮影されるものの、枚数の割合は高くなかった。このことは、レク林の計画において、主興味対象の地点だけでなく、移動経路の森林空間に対する景観的管理も重視すべきであることを示している。

5. 利用者の属性と認識される風景

それでは、活動の目的や世代の違いといった要因によっても認識される風景は異なってくるのだろうか。そこで、撮影された写真をその内容から「モノ（草花、特徴的な樹木、構造物等）」、「コト（グループ内外の人との交流、活動等）」、「バショ（遊歩道の様子、園地の風景等）」の3カテゴリーに分類し、被験者の活動類型、グループ類型、箕面への来訪回数、及び来訪季節と、各カテゴリーの撮影枚数との関係を χ^2 検定により検討した。

その結果、表3に示したように、目的とする活動、グループの構成、年代、来訪経験などの違いによって、よい、楽しいと認識される事柄や風景にも違いがあることが明らかとなった。若いグループ層や家族連れは、園地周辺での食事や水遊び、ゲームといった滞留型の利用を主目的とする場合が多く、必然的に「コト」に類型される風景が意識されやすい。一方、二人もしくは一人といった少人数のグループでは、森林の様子が風景認識の中心となる傾向が強く現れる。また、少人数の場合でも若いグループは、どちらかというと草花や特徴ある樹木といった「モノ」的な要素を強く意識するが、年輩のグループは「バショ」的な風景を指向する。また、来訪回数の多いグループほど「バショ」を多く捉える。来訪した季節と認識される風景の間には、特に関係は見られなかった。

6. おわりに

レクリエーションを科学的に理解する研究は始まったばかりといえる。「何を見ているのか」そして、改めて「どのように感じているか」を考えることが、森林の保健休養機能をより高度に発揮するための、より新しいアイデアにつながっていくだろう。現実のレクという場面をどう扱っていくか、今後のさらなる研究が必要とされている。

表 2. 認識度による風景の区分

風景区分	視対象・視点の特定が可能	認識度	箕面における事例
A 地域のランドマーク	○	高	ダム湖直線の眺望 湖上で見上げる箕面橋 熊鷹寺の建ち並ぶ
B 「図」になりやすい風景群		高	園地周辺の木道や林内での活動 天馬林内の木漏れ日 林床の草花 ツツジの緑化（季節による）
C 「地」に近い風景群		中	歩道から開ける眺望 園地での他のグループの活動
D 各人に固有の風景群	D-1 ○	低	展望台からの眺望、橋等
	D-2	低	特徴的な樹木、解説板、道標等

表 3. グループの属性と風景認識

	撮影対象		
	モノ	コト	バショ
グループタイプ			
子供連れ家族		++	--
30代以下グループ（3名以上）	-	++	--
30代以下カップル	+		
40代以上カップル		--	++
40代以上単独行		--	++
活動タイプ			
滞留型	--	++	--
散策型	++	--	++
来訪回数			
0		++	--
1-5			
6-		--	++

+は撮影率が有意に高いことを、-は低いことを示す
+、-: $P < 0.01$ ++, --: $P < 0.001$

参考文献

奥敬一，深町加津枝（1995） 写真投影法による箕面国定公園利用者の風景認識に関する研究：ランドスケープ研究58（5），173-176
奥敬一，深町加津枝（1999） レクリエーション林利用者の活動・属性・風景認識：第110回日本林学会大会学術講演集:404-405